

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見てくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第41回

クロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤング 「オールモスト・カット・マイ・ヘア」

長い髪の毛が意味するもの



Crosby, Stills, Nash & Young
"Déjà Vu"
Atlantic OSD7200 [1970] →
アートランティック©WPCR75050

「ヘア」を選んだことが自分にとってすごくよかったと思っている。

この曲は、クロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤングの70年のアルバム『デジャ・ヴ』に収録されている。『デジャ・ヴ』からは4枚もシングルがカットされたが、この曲は残念ながら選ばれなかった。しかし近年では、デイヴィッド・クロスビーがステージでこの曲を歌うと、観客がすぐ盛り上がる。そして俺にとっても今では「オールモスト・カット・マイ・ヘア」が彼らの曲の中で一番好きで、最も大切だとも感じているんだ。今でも歌詞は全部覚えている。内容を、一番考えさせてくれた曲では、歌詞を見ていこう。

Almost cut my hair

It happened just the other day

It was getting kind of long

I could-a said it was in my way

▲危うく自分の髪を切ってしまうところだった。ついこの間のことだ。少し長くなりすぎて、ちょっと邪魔になっていたからなんだ▼

1974年、俺は日本にある横浜基地の中のヨコタ・ハイ・スクールを卒業した。住まいは鎌倉だったが、わざわざ2時間半をかけて福生にまで行ったのは、福生なら高校3年のときに、週2回、半年通えば卒業できるからという理由だった。

そこでの卒業式では、生徒が自分自身を表現する言葉を選ぶようにと言われた。卒業式の当日、卒業証書を渡されるときに、

皆が自分の好きな歌詞やポエムを先生に読んでもらうためだ。俺はこの曲「オールモスト・カット・マイ・ヘア」の歌詞を読んでもらった。僕は危うく自分の髪を切ってしまうところだった…。そのときは、ただ自分の長い髪を切らずにいることしか考えていなかったけど、大人になってこの曲の本当の意味が分かってからは、卒業式の日「オールモスト・カット・マイ

But I didn't and I wonder why
I feel like letting my freak flag fly

▲でも、なぜか分からないけど、僕は髪を切らなかった。僕の「フリース」の旗を風になびかせていたいと感じているんだ▼。もともと「freak」というのは見世物小屋にいた変わった身体をしている人のこと。英語では見世物小屋を「freak show」というが、ここでの意味は少し違う。60年代、それまでのアメリカ社会に反対して出てきた新しいカウンター・カルチャーの人たちが、自身のことを「フリース」と呼んでいた。有名な場面がある。髪の毛の長い男がおじいさんとの会話の中で、なぜ自分たちのことを「フリース」と言うんだと問われた若者は、こう答える。「どうせ皆、僕たちのことをそう呼んでいるから、それでいいじゃない? 僕たちにとつて悪い言葉ではないんだ」。つまり、自分たちが新しい世代であることを証明するために髪を伸ばす。だから、ここでの「freak」は、実際の旗のことではなく、「フリース」の「象徴」といったニュアンスで使われているんだ。俺も

この時代、『ウッドストック』からの影響で自分たちのことを「フリース」と呼んでいた。

「freak」のもう一つの使い方に「freak out」があるが、これは自分を自由にして何かをやること。例えば、叫んだり飛んだり踊ったり。フランク・ザッパも、彼のバンド・マザーズ・オブ・インヴェンションのライブで、観客に「フリース・アウト」しようと呼びかけていた。それで、彼らのデビュー・アルバムタイトルの「Freak Out」となった。

Yes I feel like I owe it to someone

▲そう、それは誰かへの義務を負っていると感じているからなんだろう▼。この部分の歌詞には深い意味がある。つまり、僕らが髪を切ってしまったら（＝新しい世代としてのアイデンティティを捨ててしまったら）、どうなってしまう? けど幸せが手に入らない人が世の中にたくさんいる間は、僕らは髪を切らない」という決意表明なんだ。ヴェトナム戦争が続いていた当時だから、反戦の意味もある。反人

種差別運動の余波もあったしね。そんな気持ちを支えるため、この曲のサウンドには反抗的な雰囲気がある。「someone」とは「虐げられた不特定多数の人々」のことを指している。

Must be because I had the flu for
Christmas

And I'm not feeling up to par

▲こんな気持ちになっているのは、きっと僕がクリスマスにインフルエンザをもらってしまったからかもしれない。そして、「パー」に届いていない感じがするんだ▼。この「par」はゴルフでもよく使う言葉だけど、意味は「平均」ということ。「パー」まで上がっていない、つまり、ちょっと調子が悪いという意味で使われている。

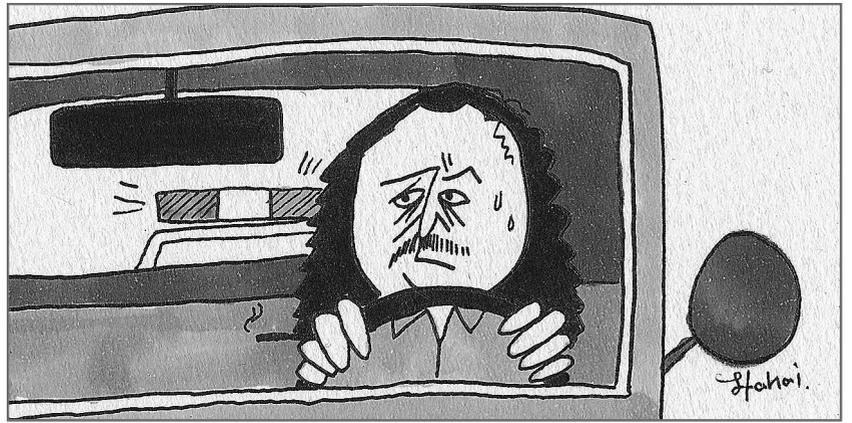
It increases my paranoia
Like looking' at my mirror
And seein' a police car

▲調子が悪いせいで、自分の中の「偏執狂」が増殖してる。バック・ミラーを見た

ら、そこにパトカーが見えるときの気持ち
みたいだ。こんな気分は、車を運転した
ことがあれば、皆わかるだろう。悪さをし
ていなくても後ろにパトカーがいるのに気
がつくと、その瞬間焦るよね。アメリカの
ハイウェイでは、パトカーがサイレンを鳴
らさず車の後についてくるのがよくある。
その間、警官は尾行している車の登録事項
を調べて、未払いの切符があるかどうかを
チェックしている。何もなければ追い越し
ざまに手を振っていなくなってしまうんだ。
アメリカの若者なら、この歌詞を聞くと、車
でハッパを吸っているときのことをきくと
思い浮かべるだろう。今でもそうだと思う
けど、70年代は髪が長いというだけで、ドラ
ッグを持っていないかどうかを調べられた。

But I'm not givin' in an inch to fear
'Cause I promised myself this year
Yes I feel like I owe it to someone

《だけど、僕は恐怖には一インチも譲ら
ないぞ》。この 'givin' in' は「譲歩しな
い」ということ。《だって、今年には自分
約束したんだから。そう、それは誰かへの



義務を負っていると感じているから
なんだと思う。前段で挫折を語った新し
い世代ロング・ヘア世代が、それでも男ら
しく生きていこうと決意を新たにしている。

When I finally get myself together
I'm gonna get down
In that sunny southern weather

《いつか自分の心と頭の中をしつかり整
理できたら、僕はあの日差しが降り注ぐよ
うな南部へ行くんだ》。'get myself to-
gether' はあまり使われないが、'Get it to-
gether' はよく使われる言葉。ちゃんとや
れよ、ちゃんとしなさいという意味だ。自
分自身にしつかりやろうと言いきかせてい
る。

And I find a place inside to laugh
Separate the wheat from the chaff
I feel like I owe it to someone

《そして、笑えるような場所を見つけよ
う。小麦ともみ殻を分けるのも、誰かにツ
ケがあるんだと自分が感じているからなん

がないよ(笑)。

だろう》。《笑えるような場所》は「自分自
身が落ち着けるような土地」という意味。
'wheat from the chaff' は小麦を空中に投
げ風に殻だけを飛ばさせて分別をすること。
でも、ここでは単に農作業のことだけでは
なくて、自分の人生にとって大切なものと
そうでないものを区別するという意味もあ
る。自分が正しく平和に暮らせるどこかを
探したいんだ。

この曲でデイヴィッド・クロスビーは、
feel like I owe it to someone」という歌詞
を繰り返しているが、3回目となるここで
の 'someone' は、デイヴィッド自身のこ
とを指している。人々のことに思いをめぐ
らすの必要だけど、やはり自分自身のこ
とも考え直さなければならぬ、と歌って
いる。つまり、これまで通り現実世界から
視線をそらすことはしないが、ロング・ヘ
ア世代が持つ価値観を共有することに喜び
を見出すだけでは進歩がないと気づき、傷
ついたり悲しんだりしながらも、地に足を
つけた状態から常に自分自身を見つめ直し
未来と対峙していこう、という意味を表わ
しているんだ。

俺が高校生のときに髪の毛を伸ばして

たのは、ただのファッションだった。俺が
かっこいいと思った人たちは、スポーツ選
手や政治家ではなかった。作家やサーフア
ーやロック・ミュージシャンだった。彼ら
はカウンタート・カルチャーの人たちで、往
々にして髪の毛が長かった。その上、俺は
LAでロック・ミュージカルの『ヘア』
を見てしまったし。

70年代の日本のアメリカン・スクールの
ロング・ヘアたちには連帯感があつて、ラ
イヴやイヴェントがあると、相手が誰だか
知らなくても挨拶をした。韓国から日本に
戻つてハイ・スクールに入学したとき、俺
は髪の毛をショート・ヘアのカツラで隠し
て登校した。70年代ではまだ、学校によつ
てはロング・ヘアは禁止されていたので、
もしもその新しいハイ・スクールで長髪が
ダメだったら、卒業するまでカツラをかぶ
り続けるつもりだったんだ。俺の場合、サ
ザン・ロック・バンドの多
クやブルー・チアリーのメン
バーみたいに、腰ぐらいま
で髪の毛が伸びていた。今
になって考えれば、そこま
で伸ばすと相手してくれる



ジョージ・カックル /
GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロッ
ク・バー「開拓地」で、
音楽の世界にのめり込
む。ハワイアンなどの
CDをプロデュースする傍
ら、インターFMでは音楽
番組「レイジーサンデー」
のパーソナリティをつと
め、音楽通ぶりを披露。
さらにサーフ・イベントな
どのMCでも活躍。
http://whatsupmusic
inc.com

女の子は少なかつた(笑)。
そして高校を卒業した何年か後、アメリ
カに住んだときに俺は気づいた。76年のア
メリカでは、髪が長いと仕事があつた。
誰も雇ってくれない。ファイヴ・マン・エ
レクトリカル・バンドというカナダのバン
ドが、髪を帽子に隠して仕事の面接に行く
「サインズ」という曲を71年に出したけど、
その内容そのままだった。もちろん大学に
行けば、ロング・ヘアはたくさんいた。ア
ッパー・ミドル・クラスの余裕のある人た
ちばかりだった。でも、普通のクラスの人
たちには、そんな波は来ていなかった。
とはいえ、誰に何と言われても髪を切ら
なかつた俺も、2回目にインドへ旅したと
きに切ってしまった。バックパックの旅だ
つたから、洗うのが面倒くさかつたんだ。
大人になつたのかな？ 21歳か22歳のころ
だ。今では伸ばそうと思つても、伸びる毛